

Title	大内氏の領国支配と宗教(Abstract_要旨)
Author(s)	平瀬, 直樹
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2015-09-24
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.r12953
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（文学）	氏名	平 瀬 直 樹
論文題目	大内氏の領国支配と宗教		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究の目的は、西国の有力大名であった大内氏の領国支配と宗教の関係を解明することにある。特に、大内氏が重視した妙見信仰について、その全貌と実態を明らかにし、妙見信仰が領国支配に果たした役割を明示することで、大内氏の領国支配の特質を考察することを主眼とする。</p> <p>第一部「家臣団統制と自己認識」では、南北朝期から室町初期にかけて、大内氏が家臣団統制のために実施した政策を検討し、あわせて幕府体制の中で自己の勢力を保持するために取った方策を論じる。</p> <p>第一章「領国支配と家臣団」では、大内氏が家臣団糾合に成功した要因の特定を目指した。大内氏の前身である在庁官人多々良氏には同族が多数存在しており、大内弘世はその同族たちを上級家臣として優遇し、妙見という氏神（守護神）を彼らと共有した。妙見の前での一体感こそが、大内氏が守護職に依存せず実力で家臣団を糾合できた要因であったと結論付ける。</p> <p>第二章「本拠地の変遷」では、明使の滞在地を特定するとともに、義弘期の内訌戦の結果、新たに編成された家臣団について分析した。その結果、南北朝期の大内氏の本拠地は、山口ではなく、大内氏の名字の地である大内村であったことを指摘した。</p> <p>第三章「在京と自己認識」では、大内義弘が在京後、将軍に対する不信感と、大名間の家格の差に苦悩する姿を検討した。義弘は室町幕府の中で自己を維持するために幕府体制の秩序とは別の権威を求めた。それは、妙見に守護され、朝鮮王朝から百済王族の末裔として認知されるというものであった。</p> <p>第一部を総合すると、南北朝期から室町初期にかけて、大内氏が国元では家臣団統制に精力を注ぎ、中央では幕府との関係に苦慮した姿が見えてくる。在庁官人から大名に発展する過程で、大内氏は小規模な家臣団の統制に見合った大内村を本拠地にしていった。しかし、義弘期の内訌戦で同族の家臣が多数滅びると、大内氏は新たな家臣を編成し、家臣団への統制を強め、家臣を集住させるための新たな本拠地として山口を整備し始めた。その一方で、義弘の在京以後、新たな自己認識を得た大内氏は、幕府体制内での地位に固執せず、領国支配を重視する価値観を持つに至ったのである。</p> <p>第二部「地域支配と寺社」では、大内氏が、山口をはじめとする都市、そして、国・郡・荘・郷といった地域を支配する上で、領国内の寺社が果たした役割を追究する。</p> <p>第一章「山口の都市空間」では、大内氏の繁栄を支えた本拠地山口に注目し、大内氏が、都市民の成長に対応し、寺社の機能を活用することによって、文化的な統制を行うという都市政策をとっていたことを論じた。大内氏は、本来は都市民のものであった祇園会を自己のために執行させ、「時衆系」の十穀聖を神社造営のための勧進に起用し、守護段銭を補っていたことを解明した。さらに、補論1では、時衆が山口に本寺として善福寺を置き、周防・長門両国内の交通の要衝に末寺を分布させ、領国内の〈ヒト〉と〈モノ〉の流れを活性化させていたこと、補論2では、長門国の赤間関や長府などでも都市民が勃興し、共同体の自治を高め、自らの祭礼を執行していたことを指摘した。</p> <p>第二章「応永の乱と堺」では、大内義弘が応永の乱で滅ぶまでのわずか七年の間ではあったが、大内氏の政治や軍事に役立った堺という都市の機能を考察した。堺は河内国及び大和国に隣接していたことから、南朝との合体交渉の拠点として最適であっ</p>			

たが、城郭を設けるだけでは守り難く、その周囲に古墳や旧南朝方の城など、何重もの防衛線を必要とした。

第三章「地域共同体と神社の祭祀」では、住民共同体の中核を成す神社の事例を三つ掲げ、神社と大内氏の地域支配との関係を考察した。一つ目の事例は周防国を代表する防府天満宮である。大内氏は天満宮に市目代の補任権及び津料の得分権を与え、門前町である宮市の商業を天満宮に監督させた。二つ目は長門国阿武郡の鎮守社の大井郷八幡宮である。大内氏はこの神社を一族で崇敬することによって、郡内諸郷の住人を懐柔しつつ、彼らへの支配を強化していった。三つ目は長門国の正吉八幡宮である。大内氏は徐々にこの神社の祭祀や紛争に介入するようになり、大宮司職を交替させる権限も得たのである。

第四章「海辺の武装勢力」では、西日本の海域に分布する海賊、警固衆、倭寇といった海辺の武装勢力と大内氏との関係を論じた。大内氏は、赤間関を直轄支配することによって海賊を取り締まり、その一方で海上交通の要衝に所領を持つ領主層を警固衆として自己の軍事力に編成した。そして、大内氏は、直接的には、北部九州の「三島」地域の倭寇を禁遏することによって、間接的には、倭寇化する可能性がある瀬戸内海、瀬戸内海を赤間関で防ぐことによって、朝鮮王朝の絶大な信頼を獲得していたのである。

第二部を神社と地域支配との関係で整理すると、国、郡、荘、郷レベルの中核となる神社に対して、大内氏は祭礼の費用を負担するなどして、神社の祭礼を奨励している様子が窺える。地域の神社の祭礼は、本来は住民がその共同体の結束のために執行するものであるが、大内氏がそれを保護することによって、次第に地域住民が大内氏に対して〈忠実さ〉を示すための儀礼となっていった。また、大内氏は海辺の武装勢力が崇敬する神社を尊重することにより、そのような勢力を懐柔することができた。大内氏は、公権力（公方）として地域の上に立つとともに、祭礼を介して地域の安定を図っていたのである。

第三部「氏神と氏寺」では、大内氏の妙見信仰が大内氏の領国支配にどのような意味を持っていたかという視点から論じる。

第一章「興隆寺と二月会」では、興隆寺の聖域の中心は妙見を祀る上宮であり、最も重視された年中行事である二月会の核心部分は、大内氏当主父子が上宮とその周辺で行う、氏神祭祀の秘儀であったことを指摘した。大内氏にとって、「氏神」とは、政治的な願望を祈願するための神であり、二月会とは、政治的な意味を持つ一連の儀式から構成された、領国支配の安定を祈願するための行事であったと言える。

第二章「大内氏と妙見信仰」では、大内氏の妙見信仰について、従来から十分に論証されていない点のうち、最も重要と思われる四点について論じた。一つ目は、大内氏の妙見信仰は鎌倉期に遡る可能性があり、自己の正統性を明示するため、守護神（氏神）を必要としたであろうという見通しが得られたことである。二つ目は、妙見と琳聖太子が結びつくまでには、琳聖太子自身が「祖神」とされるような段階を経る必要があったことである。三つ目は、大内氏がイメージした妙見の形象は、道教の真武神に由来する童子形の垂迹神であったことである。そして、妙見に付随した霊亀に由来する「亀童丸」という幼名は、大内氏の嫡子が妙見に守護されたしるしであったと判断した。四つ目は、一五世紀後半の政弘代に、祖先伝説中で、妙見が琳聖太子の守護神として大内氏の始祖と結び付けられたことである。興隆寺を中心とする妙見信仰の由緒が語られることによって、妙見は領国支配イデオロギーの中心に位置するスケールの大きな存在に変容したのである。

第三章「妙見の変貌」では、興隆寺の宗教活動が一定の教義と修法に固定されてはいなかったことを指摘した。興隆寺における妙見は、単に大内氏の氏神に留まらず、天台律僧や真言宗僧など寺外から来訪した宗教者によって、將軍の息災、さらには鎮護国家までを祈願するような国家レベルの守護神に読みかえられた。あわせて、興隆

寺には大内氏に奉仕するのとは別の顔があり、当時流行していた陰陽道的・修験道的なまじないを庶民に施していた。

第四章「日本中世の妙見信仰」では、日本の妙見信仰に及ぼした鎮宅霊符信仰の影響を論じた。妙見信仰は本来延命に関わる「星」の信仰であったが、大内氏や千葉氏といった中世武士団は真武神（鎮宅霊符神）のイメージを導入し、妙見信仰を支配イデオロギーにまで高めていった。そして、鎮宅霊符信仰は、密教各派から神道各派に至るまで、広く既成の信仰に新たなスタイルを与えており、鎮宅霊符信仰を広げる宗教者たちは、多様な呪術者に混じりあうかたちで活動していた。

第三部を総合すると、妙見信仰が大内氏の領国支配に果たした役割を整理することができる。大内氏は妙見を領国支配イデオロギーの中心に位置付けており、特に興隆寺最大の妙見祭祀である二月会では、家臣及び領民に対し費用の負担と参加を求めた。二月会は領国をあげて執行され、大内氏への忠節を義務付けるものであることから、二月会には大内氏の領国支配を正当化する意味があったと結論付けられる。また、二月会では、その一環として、妙見を祀る上宮で大内氏の当主と嫡子による秘儀が行われており、彼らの権力もまた妙見の権威によって正当化されていたのである。

また、妙見は大内氏が地域支配権力であり続けるための自己認識の根源ともなっていた。大内氏は将軍家や足利一門の権威に負けない自己認識を模索し続けており、祖先伝説を整備することにより、他の大名家が持たないような権威を生み出そうとしたと判断される。政弘の代に体系化された祖先伝説の骨子は、〈大内氏の始祖が百済から渡来し、始祖を守護するために下降した妙見が大内氏の守護神（氏神）となった〉というものである。

本研究は大内氏の妙見信仰について論ずることを主眼としながらも、妙見信仰を含めた宗教全体と大内氏の領国支配の関係を解明することを目指している。第一部から第三部にかけて論じて来た内容を整理し、大内氏が領国支配に役立てた三つのタイプの寺院から大内氏の領国支配システムを総括する。

大内氏が最も重用した寺院は、妙見信仰の中心に位置する興隆寺である。この寺には特に末寺というものはなく、大内氏にとって唯一の存在であった。興隆寺は顕密仏教を代表する天台宗の寺院であったが、大内氏が興隆寺に求めたものは、もはや天台宗の「権威」ではなく、天台密教を基盤としながら、道教信仰の影響を受けて成立した、大内氏独自の妙見信仰であった。

二つ目のタイプは禅宗寺院である。大内氏は鎌倉末期の重弘代以降、山口の近辺に歴代当主の菩提寺として臨済宗寺院を建立していった。禅宗は鎌倉期以降、葬祭の分野に進出したことから、権力者に重用されており、大内氏もこれに倣ったものと思われる。大内氏の菩提寺は幕府が重用する臨済宗の五山派に属していた。大内氏は、幕府との親密さを誇示することにより、家臣に対して自己の地位を高く見せようとした。あわせて、歴代当主の忌日ごとの参拝を家臣に義務付けることで、主従関係を再確認させたのである。

三つ目のタイプは時衆寺院である。時衆寺院は、山口善福寺（山口道場）を本寺として、周防・長門両国内の宿・市・町に末寺が分布していた。本寺の善福寺は大内氏館の近傍に位置し、寺僧は連歌師や絵師として大内氏に対し芸術面で奉仕していた。注目すべきはその末寺であり、宿駅の機能を果たし、念仏により民衆を市に引き寄せており、それら末寺が領国内に広く分布することによって市や宿の連携が図られたと考えられる。大内氏は本寺の善福寺と親密であり、大内氏家臣が領国内の末寺を後援していたことから、大内氏は結果として領国内の〈ヒト〉と〈モノ〉の流れを活性化させていたと言えることができる。

大内氏はこのような三つの異なるタイプの寺院を、適材適所で機能させるシステムを生み出し、それが大内氏領国の宗教的秩序であったと結論付けられる。大内氏の領国支配に寄与する寺院とは、「顕密仏教」か「鎌倉新仏教」という教義上の区別では

なく、大内氏の求める分野で役に立つかどうかで選択されていたのである。

最後に、本研究全体を総括して、大内氏領国における宗教の機能は、大内氏と家臣、荘や郷の住民同士、市の商人と客など、領国内の〈人と人とを結びつける〉作用であったと主張する。大内氏は、このような宗教の機能を活かして領国内をコントロールしようとしたのである。①家臣団、②領民（民衆）、③海辺の武装勢力という領国内の三つの社会集団に対して、大内氏が取った対応から、大内氏の宗教政策をまとめる。

家臣団に対しては、大内氏は二月会をはじめとする興隆寺の法会に動員し、さらに歴代当主の忌日に各菩提寺（禅寺）に参拝することを義務付けていた。大内氏は主従関係の中心に興隆寺を据え、禅宗寺院も主従関係の確認に用いることで、権力の維持・強化を図っていた。領民に対しては、大内氏は各地域レベルの神社の祭祀に関与することによって、地域の共同体に干渉し、間接的に領民を監督していた。また、大内氏は時衆寺院を地域の流通経済の活性化に役立てていた。さらに、海辺の武装勢力に対しては、大内氏はそのような勢力が崇敬する神社と親密な関係を築いており、本来は守護権によるコントロールが困難な勢力を懐柔することができた。

以上、大内氏の領国支配は、あらゆる面で宗教の力を借りてこそ実効力を発揮したと結論付けられる。

地域支配権力と宗教の関係から中世社会を論じた本研究は、これだけでは中世日本全体を語ることはできない。しかし、本研究で試みた方法論は、他の地域、他の大名領国にも適用されることによって、中世後期における国家と宗教、社会と宗教の関係の総体を明らかにできる確実な道であると提言する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、西国の有力大名である大内氏の領国支配の特質を、寺社への施策、大内氏の信仰や始祖神話など主に宗教史的な視角から解明しようとするものである。全体は3部11章からなり、序章と終章が配されている。序章では、研究史を総括し、課題を提示する。第1部では家臣団統制策と室町幕府との関係を、第2部では領国内の寺社が果たした役割を、第3部では妙見信仰が領国支配に有した意義を分析する。

中世の守護大名・戦国大名による領国支配に関する研究は、おもに政治的な視角や社会経済的な側面から考察がなされており、大名による家臣団編成、領内への諸役・賦課、商業統制など様々な論点を扱った詳細な研究が次々に発表されている。大内氏の領国支配を考察する本論文では、政治的・社会経済的な分析に加えて、宗教政策に着目する点が斬新である。そして、大内氏の領国支配において宗教が果たした役割の実態とその全貌を丁寧に解明することで、先行学説とは異なる大内氏の領国支配の特質を提示することに成功している。特に、著者はこれまで本格的に検討されることのなかった大内氏の妙見信仰に着目し、様々な宗教施策のなかでも妙見信仰こそが領国支配の中核に位置づけられることを詳細に実証した点が大きな成果といえる。

以下、章ごとに本論文の主張点とその意義について簡潔に述べることにする。

第1部第1章では、大内氏の家臣団編成の実態を考察する。大内弘世は同族を上級家臣として取り立て、妙見を一族の守護神とすることで、妙見のもとでの一体感こそが家臣団を糾合できた要因のひとつであったとする。信仰を共有することで家臣団編成を強化したとの論点は新鮮である。

同第2章では、大内弘世期には名字の地たる大内村が拠点であったが、義弘と弟満弘との対立が合戦にまで至り、同族の多くが滅びることとなり、家臣団のあり方が変化し、新たな本拠地として山口が選ばれたと述べる。史料に基づき大内村を本拠地と比定する論証は説得的で、大内村から山口へ拠点が移動したことを義弘期の家臣団再編と関連づける点も興味深い。

同第3章では、在京した大内義弘が將軍義満に持った不信感や、諸大名との家格差に苦悩した事実を明らかにした上で、大内氏にとっての独自の由緒を創出するために、妙見信仰とともに、朝鮮半島に自らルーツを求めたと述べる。そして、百済の王族琳聖太子の末裔とする伝説は盛見の代に確立するという。大内氏の始祖伝説の形成を政治史との関連で論じた点が注目される。

第2部第1章では、大内氏の本拠地山口における祇園祭や勧進の実態を検討し、大内氏が寺社の機能を活用することで、都市民を文化的に統制していたことを論じる。

同第2章では、大内義弘が和泉守護として7年間支配した堺を取りあげ、大内氏の政治・軍事上において都市堺が果たした機能を考察する。前章とともに、都市研究の視点より宗教を含めた領国支配の具体相を提示していることが重要である。

同第3章では、地域共同体の中核をなす神社である周防国防府天満宮、長門国阿武郡鎮守の大井郷八幡宮、長門国正吉八幡宮を取りあげ、各神社と大内氏との具体的な関係を示した上で、大内氏が神社を介して地域支配を実現していたと結論づける。本章は、著者が発見した地元の史料をも用いて立論されており、注目される。

同第4章では、海賊としても活動した海辺の武装集団と大内氏との関係を論じる。赤間関を支配した大内氏は、海賊・倭寇の禁遏を行うが、そのさい、海上交通の拠点をおさえた領主層を自らの警固衆に編成して軍事力を強化したという。

第3部第1章では、大内氏の氏寺興隆寺における祭祀を取りあげ、その意義を考察する。氏神妙見を祀る興隆寺の上宮は聖域とされ、二月会にさいして上宮周辺で

は大内氏当主父子が妙見を祀る秘儀を行い、それは自らの権力を正統化する場であり、同時に政治的な願望や領国支配の安定が祈念されたとする。これまで検討されることがなかった二月会上宮での儀礼を詳細に復元し、その意義を論じた点は重要である。

同第2章では、大内氏の妙見信仰の形成・変遷・特質を体系的に検討する。大内氏の信仰が鎌倉期にまで遡ること、大内氏が崇めた妙見は道教の真武神に由来する童子形の垂迹神で、嫡男には妙見に付随する霊亀を意味する「亀童丸」という幼名を付けることで妙見の守護を求めたこと、15世紀後半に妙見が大内氏の始祖とされた琳聖太子と結びつき、領国支配のイデオロギーが確立することなどを明らかにする。大内氏の歴史を宗教イデオロギーの視点からこれほど詳細に論じた研究は他に類をみない。

同第3章では、天台宗寺院である興隆寺には天台律僧や真言宗僧も来訪し、彼らは妙見に將軍の息災や鎮護国家までを祈願しており、妙見は単に大内氏の氏神に留まらない意義を有したとする。同時に、興隆寺では種々のまじないも行われ、庶民の信仰をも取り込んでいたことを指摘する。

同第4章では、日本における妙見信仰史のなかで、大内氏の信仰の特質を論じる。本来、延命を求める妙見信仰が、真武神（鎮宅靈符神）として受け入れられ、それが領国支配イデオロギーにまで高められた点が大内氏の特徴で、呪術者を含む多様な宗教者がかかる信仰の形成に寄与したことを描く。

以上述べてきたように、大内氏による領国支配を権力論のみならず、多様な宗教施策を詳細に分析して、その歴史的変遷を体系的に論じることで、これまでにない豊かな像を描き出した点が本論文の最も重要な成果である。特に、大内氏が地域権力としての正統性を確保し、將軍家や足利一門にも負けない自己認識を得るために、妙見信仰と始祖信仰を整備し、政弘の代に体系化された、始祖が百済から渡来し、始祖を守護するために下降した妙見が大内氏の守護神になったという伝承の形成・意義を詳細に論じた点は注目される。また、関連する諸分野における近年の研究成果を積極的に吸収するとともに、地元での史料調査の成果をも組み込み立論されていることも評価できる。しかし問題がないわけではない。宗教が持つイデオロギー性を強調するため、現実の領国支配の実態とは乖離した理念的な記述となっている箇所が見られる。だが、こうした点は、論者の今後の努力によって克服されるであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年4月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。